

飽食と貧困 格差実感



食事を通して格差を体験する高所得層グループ(手前)と低所得層グループ(奥)

食事を通して飽食の国と貧困の国の格差を体験するワークショップ「ハンガーバンケット」が23日、室蘭市高砂町の海星学院高校(堺俊光校長)で開かれ、1年生57人が三つのグループに分かれて世界と日本の食料事情について考えた。(奥野浩章)

室蘭・海星学院高でハンガーバンケット

16日の世界食糧デーにちなんだ取り組み。カンボジアなどを訪れ、飢餓にあえぐ子どもを実際に見てきた市川栄作教諭が講師を務め、アジア・アフリカの発展途上国の実態を紹介した。

食事体験では、生徒はくじ引きで高所得層、中所得層、低所得層に分かれ、高所得層は豪華なおードブル、フルーツ、お菓子、ジュースを自由に飲食できるのに対し、中所得層はパン、チーズ、スープ、低所得層は食パン4分の1と水のみという内容。

豪華な食事を堪能した高所得層グループの佐々木一さんは「おなかいっぱい食べても食べ物に余っていて、これは現実の世界でも変わらないと思った。僕たちが食品ロスを出しているせいでもあるので、生活を見直して間接的に世界の問題を解決していけたら」、低所得層グループで貧困を体験した三橋志穂さんは「今の自分たちの生活がとてもありがたいと感じた。ずっとこの食事をしている人が栄養失調になるのが分かりました」と感想を話していた。